

# 「非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての 研究報告書」の概要について

## 1. 調査研究の目的・概要

### （1）調査研究の目的

人の生涯にわたる適応を支えるものとして、旧来は、IQに代表される認知的な能力に主たる関心が向けられてきた。しかし、近年、その見直しを迫る研究知見が多く報告され、認知的ではない側面、いわゆる非認知的能力が持つ重要性が注目されている。ただし、非認知的能力とは一体どのようなものであるのか、十分な整理がなされているとは言い難い。本研究プロジェクトでは、非認知的能力と称されるものについて、具体的な議論の展開に資する成果を得るべく、二つの目的を定めた。第一に、関連する学問領域の文献調査によって、非認知的能力の具体的な内容を示すことを目的とした。さらに、関連する研究分野では非認知能力が抽象的概念としてのみならず、測定や記述の対象になっている現状に鑑み、科学的検討を行うための手法についても調査することとした。第二の目的として、非認知的能力のいくつかについて、実際に我が国の子供たちを対象に測定や記述を行い、子供たちの発達や実態についての調査を行うこととした。

### （2）調査研究の概要

非認知能力と称されている、我々人間が持つ様々な特徴について、本研究では、特に、「社会情緒的コンピテンス」に焦点を定めることとした。これは、「自分と他者・集団との関係に関する社会的適応」及び「心身の健康・成長」につながる行動や態度、そしてまた、それらを可能ならしめる心理的特質を指すものである。ここでの心理的特質とは、認識、意識、理解、信念、知識、能力、特性などを含むものとした。

第一の目的について、社会情緒的コンピテンスの発達と内容についての研究が蓄積されている発達心理学、教育心理学、発達科学等の領域、非認知能力の効果については、経済学等の領域における研究知見を幅広く収集して文献調査を行った。社会情緒的コンピテンスの具体的な内容を発達段階ごとに整理すべく、「乳児期班」「幼児期班」「児童期・青年期班」の三つによって研究を進めた。また、社会情緒的コンピテンスについては、複数の発達段階をまたいだ発達や環境要因との関連、各種の帰結との関連を検討するための大規模縦断研究が複数実施されていることから、「長期縦断研究班」において、そうした研究知見の整理を行った。

第二の目的について、乳児、幼児、児童・生徒を対象に社会情緒的コンピテンスの測定を実施した。乳児、幼児については、行動実験、観察、養育者への質問紙等の方法を用いて、小規模ではあるが測定と記述を行った。児童・生徒については、自治体、学校等からの協力を得て、小学生、中学生及び高校生並びにその家庭、学校の教師を対象に大規模、かつ、2年間にわたる質問紙調査を実施した。

## 2. 研究成果の概要

### (1) 非認知能力をめぐる研究動向について …第1部

経済学及び心理学の領域並びに国際機関における非認知的能力や社会情緒的コンピテンスをめぐる研究動向について示した。我々が持つこうしたコンピテンスは，どのような関心の下に研究の対象となってきたのか，それらの研究成果が意味するところと社会や教育への活用の視点，また，教育実践の場で議論，活用する際に留意したい点などについて，研究知見の整理に基づき論考を示した。

### (2) 社会情緒的コンピテンスについての文献調査 …第2部

第2部第1章～第4章では，乳児期，幼児期及び児童期・青年期の発達段階ごとに，各時期に顕著な発達や行使が認められる社会情緒的コンピテンスの内容を知見に基づきリストアップして示した。社会情緒的コンピテンスの名称，定義，測定方法（実験，観察，課題，質問紙尺度など）に加え，コンピテンスの発達を予測する要因（社会的・物理的環境の特徴や個人が持つ他の特徴など），コンピテンスの状態が関連したり，予測したりする帰結（認知能力，心身の健康，心理的変数，社会経済的状态など），について研究知見をまとめた。さらに，各コンピテンスを「自分に関する行動や態度，心理的特質」（例：自己意識，感情の発達やその制御，行動制御，動機づけ，気質，パーソナリティ），「他者，他者集団など，個人が関係を築く相手に対する行動や態度，心理的特質」（例：他者の感情への気付きと理解，他者の行動と心の関係の理解），「対人関係，社会や環境と自分の関係に関する行動や態度，心理的特質」（例：アタッチメント，感情語等の使用やコミュニケーションに関わるスキル，向社会性）という3領域に大別して整理した。これらの知見の整理に基づき，コンピテンスの発達の流れをつかみやすくするようにまとめたものを表1として，各コンピテンスの定義，測定法，予測因，帰結をまとめたものを表2として巻末に掲載した。

第2部第5章では，社会情緒的コンピテンスに関する大規模縦断研究についての文献調査の成果を示した。特に，国外では，コンピテンスの長期的な発達や，物理的環境や文脈からのコンピテンスへの影響，コンピテンスの状態と様々な帰結との関連について，大きなサンプルに基づく，また，長期的な追跡調査に基づく研究が複数実施されている。これらの大規模研究から得られている知見をまとめるとともに，第5章の末尾には，これまでに実施されている長期縦断研究プロジェクトの名称，目的，対象者，主な変数といった内容を一覧にした表を収めた。

### (3) 子供を対象とした社会情緒的コンピテンスの測定…第3部

第3部第1章では，乳児期の社会情緒的コンピテンスとして，社会的コミュニケーション行動の発達に着目し，実験や観察によって実証的研究を行った。乳児期早期に測定された他者への敏感性といった特徴が，乳児期後期のコミュニケーション行動に関連していることなど

が認められた。第2章では、幼児期のセルフコントロールの発達及び他者の感情や信念の理解に関する実証研究を行った。一連の実験や観察、質問紙による測定から、これらの社会情緒的コンピテンスは、幼児期に顕著な発達が認められることが示され、さらに、今後、養育環境などによる発達への影響について検討する必要性が示された。なお、乳児と幼児に対する実証研究は、小サンプルに基づく予備的研究であることから、ここで得られた測定結果や分析結果が限定的であることに留意されたいが、今後のより大規模な調査研究の設計に資する情報として、乳幼児を対象とした実証研究の手続きや測定方法の内容を示した。

第3部第3章では、児童期・青年期に関する社会情緒的コンピテンスの実態調査として、小・中・高校生を対象として実施した調査の実施方法や結果の一部を示した。自己報告式の質問紙への回答が得られるようになる年齢を考慮し、小学4・5年生、中学1・2年生、高校1・2年生を対象に質問紙調査を行った。平成27年度に行った1回目の調査の後、調査対象者の学年が一つ上がる平成28年度には、追跡調査として2回目の質問紙調査を実施した。調査項目としては、社会情緒的コンピテンスを測定するものとして国内外の先行調査で使用されたものや、子供たちの学校内外での生活の実態を把握するものなど、広範に設定した。また、子供たちの社会情緒的コンピテンスに関連すると目される環境の特徴についても情報を得るべく、児童・生徒に加えて、その保護者及び学校の教師にも質問紙調査を行った。

現在までに分析を終えている1時点目の調査から、児童・生徒が持つ各種社会情緒的コンピテンスの状態について実態を示す基礎的データが得られた。我が国においては、児童・生徒の社会情緒的コンピテンスの育成に係る政策の方針を定める上での実証的データが決定的に不足している。そのような中、本調査は教育委員会が選定した学校を対象としたものであり必ずしも日本全体を代表する標本ではないものの、大きな標本に対して、多くの変数を測定した調査により実証的データを得たことの意義は極めて大きい。今回サンプルサイズの大きい調査によって社会情緒的コンピテンスを測定した尺度得点の記述統計量や信頼性の指標を報告し、国内の子供の実態としての参考値を示すことができたとともに、社会情緒的コンピテンスの測定尺度が日本の児童期・青年期の子供達を対象に今後利用できるものであることを示す上で重要となるデータを得ることができた。また、測定されたコンピテンス間の関連についての分析から、児童・生徒が持っている感情知性の状態や、教師や友人との間に築いているアタッチメントの機能は、児童・生徒の学習への取組や動機づけに関連するといった様相が認められた。

なお、今後も2時点目の調査に関する分析を継続して行い、社会情緒的コンピテンスの測定尺度の測定結果について、日本の子供たちの実態にせまるべく、先行研究が示す値との共通点や相違点の検討などを行う予定である。そして、社会情緒的コンピテンスの発達、コンピテンスと学業や学校適応、幸福度などとの関連、コンピテンスに関連する社会的・物理的環境の特徴についての知見を得るための分析も進めていくこととしている。